～小学校：算数・中学校：数学編～

	小 学 校 算 数	中 学 校 数 学
教科目標	算数的活動を通して、数量や図形についての基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考え、表現する能力を育てるとともに、算数的活動の楽しさや数理的な処理のよさに気付き、進んで生活や学習に活用しようとする態度を育てる。	数学的活動を通して、数量や図形などに関する基礎的な概念や原理・法則についての理解を深め、数学的な表現や処理の仕方を習得し、事象を数理的に考察し表現する能力を高めるとともに、数学的活動の楽しさや数学のよさを実感し、それらを活用して考えたり判断したりしようとする態度を育てる。
領域・内容	＜現行＞ → ＜新課程＞ A 数と計算 → A 数と計算 B 量と測定 → B 量と測定 C 図　形 → C 図　形 D 数量関係 → D 数量関係←1,2 年にも設定 ※各学年の内容に算数的活動を位置づける **算数的活動**…児童が目的意識をもって主体的に取り組む算数にかかわりのある様々な活動。	＜現行：３領域＞ ＜新課程：４領域＞ A 数 と 式 → A 数 と 式 B 図　形 → B 図　形 C 数量関係 → C 関　数 D 資料の活用 ※各学年の内容に数学的活動を位置づける **数学的活動**…生徒が目的意識をもって主体的に取り組む数学にかかわりのある様々な営み。
授業時数	＜現行＞ ＜新課程＞ 1年 114(3.4) ⇒ 136(4) 2年 155(4.4) ⇒ 175(5) 3年 150(4.3) ⇒ 175(5) 4年 150(4.3) ⇒ 175(5) 5年 150(4.3) ⇒ 175(5) 6年 150(4.3) ⇒ 175(5) ※（ ）は週当たりの時数 移行措置期間中は新課程の授業時数を適用する。	＜現行＞ ＜H21＞ ＜H22･23＞ ＜H24～＞ 1年 105(3) ⇒ 140(4) ⇒ 140(4) ⇒ 140(4) 2年 105(3) ⇒ ⇒ ⇒ 105(3) 3年 105(3) ⇒ 105(3) ⇒ 140(4) ⇒ 140(4) ※（ ）は週当たりの時数 平成 21 年度から第 1･2 学年で、平成 22 年度から第 3 学年で、移行措置を実施し、授業時数を増加する。その結果、時数については平成 22 年度から新教育課程と同じになる。

＜指導の場面で＞

○内容の系統性を重視して指導する

- **反復（スパイラル）による教育課程の編成**…数量や図形に関する基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図る観点から、算数・数学の内容の系統性を重視しつつ、学年間や学校段階間で内容の一部を重複させて、発達や学年の段階に応じた指導の充実を図る。
- **「学びなおし」の機会**を設ける…「学びなおし」とは、復習の重視だけを意図するものではなく、新しい内容を指導した際に関係する既習の内容を再度取り上げ双方の理解を深めることをめざすものである。

○算数的活動･数学的活動のより一層の充実を図る

算数的活動・数学的活動は、基礎的･基本的な知識･技能を確実に身に付けるとともに、数学的な思考力･表現力を高めたり、算数･数学を学ぶことの楽しさや意義を実感したりするために、重要な役割を果たすものである。

○全国学力･学習状況調査の結果から

〈小学校･算数〉・「８０－３０÷５」「３＋２×４」といった四則混合計算の定着に課題がある。

〈中学校･数学〉・基礎的・基本的な知識・技能が十分に身についているとはいえない。

・「記述式問題」で、①見いだした事柄や事実を説明する　②事柄を調べる方法や手順を説明する　③事柄が成り立つ理由を説明する　ということに課題が見られた。

■学習教材データベースなどを活用して、「基礎的・基本的な知識・技能」の定着を図る。
■「習熟度別少人数授業」などの個に応じた指導の工夫をする。
■どのように計算したのかなど自分の考えをわかりやすく説明したり、互いに自分の考えを表現し伝え合ったりするなどの「言語活動」の充実を図る。
■児童・生徒の算数・数学を学ぶ意欲を高めたり、学ぶことの意義や有用性を実感したりできるようにする。